

カリブ海移動文学から連帯の運動文学史へ

Toward a History of Solidarity in Literature: Migrant Writing from the Caribbean

阿部 小涼
ABE Kosuzu

琉球大学人文社会学部
University of the Ryukyus, Faculty of Humanities and Social Sciences

キーワード
カリブ海文学 連帯 人びと 運動 他性 かれら

Keywords
Caribbean Literature; Solidarity; People; Activism; Alterity; They

Quadrante, No.24 (2022), pp.175–185.

目 次

1. カリブ海移動文学と吉田さんの仕事
2. 群衆というアクティヴィズム、高江、スピヴァク
3. スコット、エドワーズ、連帯とカリブ
4. 「黒い王者たち」の恥と罪責

1. カリブ海移動文学と吉田さんの仕事

吉田裕『持たざる者たちの文学史：帝国と群衆の近代』（月曜社、2021年）（以下、「本書」と記す。また特記のないページ数は本書を典拠とする）の書評コロキウムにお招き下さりありがとうございます¹。

書評に入る前段として、著者である吉田裕さんのこれまでの仕事から関連する3つの翻訳をスライドに紹介しました。まず共訳者として分担している、ポール・ビュール著、中井亜佐子・星野真志・吉田裕訳『革命の芸術家：C・L・R・ジェームズの肖像』（こぶし書房、2014年）で、本書の第3章で取り上げられるジェームズの

伝記として書かれたものです。それから、単独で翻訳しているジョージ・ラミング著、吉田裕訳『私の肌の砦の中で』（月曜社、2019年）。これは本書第5章で非常に深い分析がなされているラミングの代表作ともいべきもので、「カリブ海文学」なる文学ジャンルがあるとすれば、その中で必ず挙げられる1冊ではないかと思っています。ラミングが日本語に翻訳されているというのは、私には事件と思える、重要な翻訳の仕事です。そしてもっとも新しい翻訳が、スチュアート・ホール、ビル・シュワルツ著、吉田裕訳『親密なるよそ者：スチュアート・ホール回想録』（人文書院、2021年）です。表紙の写真も美しい装丁で仕上がっています。このところホールを回顧する論文集がハーヴァード大学出版から次々と出版されているところで、その中の1冊に位置づけられているビル・シュワルツ編集の回想録が、今回、吉田さんの翻訳によって上梓されました。これも私にとっては大事件の翻

¹ 本稿は、書評コロキウム「「かれら」とは誰か——『持たざる者たちの文学史』を読む」（2021年11月6日14時、Zoomビデオ会議による開催）の口頭発表の反訳に当日使用したスライド資料の内容を加えて再編集し、発表時に言及が充分ではなかった若干の点を追記したものである。発表の機会を与えて下さった WINC の皆さま、ならびに反訳作業を担って下さった東京外国語大学海外事情研究所の皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。

訳です。

今日の書評会で取り上げる吉田さんの単著の装丁は、紹介したこれら3冊の翻訳書と比べると、まるで「ホワイトアルバム」のような、「ホワイトブック」と呼びたくなるようなシンプルさです。それだけに、内容の重厚さ、分厚さが、かえって際立つ、そのような意味で、美しい装丁に仕上がった本であると思います。

本書では、カリブ海の著述家たち、思想家たちと呼ぶべき顔ぶれとその作品、彼らのインターナショナリズム、そのような「動き」、そして彼らの活動に覆いかぶさってくる米国という帝国の影が論じられています。その「動き」がアフリカへ、アフリカから最後は韓国へと架橋されて幕を閉じるという壮大な移動の文学史、あるいはAALA(アジア・アフリカ・ラテンアメリカ)文学史というジャンルがもしあるとすれば、そのようなものとして位置づけられる著作になっています。

この1冊を貫いているのが、「群衆」というキーワードです。被植民者たちが「我々」を構想するとき、それがどのような力学において行われたのか、あるいはどのような力線によって分断されていくのか、それをテキストから丹念に解き明かす、そのような著作になっています。それぞれ個別の著者、あるいは作品を取り上げて、重厚な記述で論を展開していく独立した7つの章からこの本は編まれています。しかし、「はじめに」と「おわりに」によって、「群衆」というものが作品の中でどのように出現し、そしてある効果を持ってきたかという全編を通底する問題提起に貫かれていることが言及され、単著としての編纂の手際の美しさが伺えます。いっぽう、それぞれの章もまず冒頭に問題提起があり、それらをどのような結論に向かって導こうとしているのかが予告的に提示されていて、首尾

よく整理された文章が、それぞれの章の独立性を極めて高いものにしています。これから読むなら、どの章から読み始めることも出来る本になっています。

巻末に集約されている注記も大変重要です。その重要性が理解されつつも充分に行き届いているとはいえないカリブの移動する文学史の、拡散する現場を見つけ出し、先行研究者たちがどのように議論を展開しているのか、丁寧に、そして幅広く紹介する注記が備えられています。何だったら注記から読み始めることもお勧めしたい本でありました。

研究書というものに、何か性格描写があるならば、この本はとても几帳面で、そして誠実、というような言葉がふさわしい。私自身の読書体験として、読み終えてしまうのが本当にもったいない、惜しい、もっとずっと読んでいたい、というような不思議な本でもありました。

ところで、私は、2018年に東京で社会運動について話をする機会があり、「わたし」が「わたしたち」になる瞬間が、社会運動の時間なのだというようなおしゃべりをしたことがあります²。そのような考えを持つ者として、中井亜佐子『〈わたしたち〉の到来：英語圏モダニズムにおける歴史叙述とマニフェスト』（月曜社、2020年）は、〈わたしたち〉という一人称の複数形を考えるよう促している見逃せないタイトルを持つ本です。社会運動のエージェンシーが複数によって行なわれるということを考えるときに、「わたしたち」という言葉と、そして吉田さんが本書で提起する「群衆」という言葉は、重なっているようで、しかし簡単に距離を縮めることは難しい、そのような、概念におけるカウンターパート的な位置づけのようでもあります。例えばそれは、本書において、「群衆」への視線をめぐる彼我の線引きが、植民地を舞台とし

² 「わたしがわたしたちになるとき：軍事主義とたたかう社会運動」、「生きられたアナーキズムの文化実践：自律空間の創出とサブシステム」研究会（研究代表：渋谷望・日本女子大学現代社会学科教授）日本女子大学 2018年2月17日。

た連帯の問題であることを射貫く次のような箇所明らかにす。

「われわれ」と「彼ら」とのあいだの境界線が、時代の地政学的・経済的な利害関心に沿って、つねに新たに引き直されるのならば、帝国の中心において帝国主義と植民地主義を何度も問い直すという持続的な試みは、いまだ必要とされているということだ。その試みの一助として、群衆へのある種の固定的な見方が、植民地の集合的な他者への眼差しと通底している、あるいはそれを忘却しているということを、本書の出発点とする。(p.21)

本としての物質的な違いと言いますか、大きさや表紙の手触り、そして、題材として取り上げられている作家や作品においても、重なり合いつつ好対照をなしているという意味で、この2冊を、私は対になって世の中に投企された、問題提起された本として手に取りました。本書の「あとがき」を読んでからはじめて、中井さんが吉田さんの論文指導教員であったことを知った次第です。

2. 群衆というアクティヴィズム、高江、スピヴァク

このように私は吉田裕さんの研究上のプロフィールや専門分野に通じていませんが、特別に語ることができる接点があるとするればそれは、沖縄県東村高江の米軍基地建設に反対する座り込みの現場です。同じく本書の「あとがき」によると、2009年に吉田さんは初めて高江を訪問した、とありますので、私が吉田さんと初めて会ったのはその頃ということになると思います。

友人である若手研究者の大野光明さんと同じタイミングで高江に座り込みに来ていた大学院生、それが初対面の吉田さんでした(記憶が曖昧なので間違っていたら後で訂正してください)。名前だけを先に聞いて「あの日本史研究の大家が座り込みに来たのか!」と驚いたという、吉田さん「あるある」なエピソードが、私にとっての始まりでしたが、座り込みを支えていた家族のお子さんに風貌がよく似ていた吉田さんは、そのような素朴な契機もあってか、構えることなく座り込みの現場にあたたく受け入れられていた、というのが私にとっての最初の吉田さんの印象でした。

その初対面の時だったか、別の機会だったか定かではないのですが、高江の座り込みのテントで吉田さんと話をしていた時に走り書きをしたメモが手元に残っています。「Mark Sanders / Intervention / Spivak の DeMan を / ちがいを使って」とあり、慌てて書いてだけに、今見返すと意味不明な謎のメモです。当時スピヴァクの戦略的本質主義について、運動の現場にしながら、どう整理したらよいのか、どう考えれば落着けるか、私としてはどこか腹に落ちてこない感触を持っていた時期でしたから、恐らくそのような趣旨のことを若手研究者である吉田さんに、無茶振りの持ちかけた、そのような流れであったように記憶しています。その時に、吉田さんが、こういう人がこういう議論をしているので、それが参考になるかもしれませんよ、と教えてくれた、それを急いで書きとったメモでした。

座り込みテントから戻って早速 Mark Sanders という名前を検索し、論文を探し当てて読んでみることにしました。ところが、Mark A. Sanders という全く違う人物³を探し当てて、そちらの方に私自身の思考が向かってしまった、

³ Ricardo Batrell, Mark A. Sanders ed. and trans., *A Black Soldier's Story: The Narrative of Ricardo Bartrell and the Cuban War of Independence* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2010).

そのままこの時のメモは宙ぶらりんになって今日に至っています。「吉田裕」違いに留まらず、Mark Sanders も間違ってしまったという凄まじい脱臼ぶりのエピソードです。しかし本書の「はじめに」が、その謎解きの文章となりました。

吉田さんは支配する権力も対抗する側も、群衆というものを一枚岩に想像してしまう、という問題を取り上げるのですが、そこで、例えばC・L・R・ジェームズの場合には「ほとんど戦略的と言っても良いようなかたちで、大衆を措定する」(p.31)という。それが引き起こすのは次のような事態です。

一方では従属階級(サバルタン)を軽蔑的に一枚岩とみなす立場があり、他方では抵抗する攪乱的な統一体とみなす立場があるが、このような一見したところ対立する「大衆」についてのそれぞれの見方が、男性優位の規範を裏書きするにあたって共犯的となる事態。(p.33)

本書で吉田さんは、そのような事態を確認しつつ、テキストをどう読むのかを示します。

自分たち自身の語彙とスタイルでもって、これらの問題を引き継ぎつつも、批判的に再構成してきた。これらの新たなスタイル、あるいはスタイルの絶えまない発明に対して、その失敗や成功も含めて、現在の質問として読み直す。(p.33)

このとき、アポリアと呼ぶべきこの事態を読み直す方法を切り開いた先行研究者としてスピヴァクが導き入れられます。サバルタンの女が二重に抹消されるという問題提起が、そのようなかたちで首尾よく整理されるのです。スピヴァクのアレゴリー理論が展開されていくこの箇所

は、本書「はじめに」のひとつの山場になっています。

ド・マンの脱構築的なアレゴリーの定義、その定義が「アイロニー」へと流れ込む場面をお勧めするが(このように私はつねにド・マンを捻って用いる)それは、他の仕方で語ること、というアクティヴィズムを考慮に入れている。ここでは、距離を、執拗な介入「永久的なパラバシス」をスピヴァクが言い替えたもの」へと変えることが要点なのだと提起したい。その介入の場では、応答可能な最小限のアイデンティティ主義によって想定され、定位不可能な他性において定位する allegorein [他の仕方で語る] の行為体は、それゆえ、他の仕方で、の「他」に位置するとみなされる。(Spivak 1999: 156) (pp.34-35、下線による強調は筆者)

これはスピヴァクの『ポストコロニアル理性批判』からの引用箇所です。すでに精緻な日本語で翻訳出版されていますが⁴、吉田さんはこれを原著から参照して、日本語版とは少し異なる翻訳をしている。翻訳者としての吉田さんがスピヴァクの注記をさらに補足することで、吉田さん流の読みに引き込んでいるということが分かります。それは、上記の引用文中の下線で強調したところ、「他の仕方で語る」という「アクティヴィズム」という表現や、「距離を執拗な介入へと変える」とか、あるいはその介入の場での「他」という行為体がどのように「定位」されるかという下りで「応答可能な最小限のアイデンティティ主義」という言葉が使われている、このような訳出に明らかです。

そして、このスピヴァクの引用に続いて紹介されるのが、先行研究者マーク・サンダースの

⁴ G・C・スピヴァク著、上村忠男・本橋哲也訳『ポストコロニアル理性批判』月曜社 2003年、pp.228-229。

越境文学論におけるスピヴァク読解です⁵。なるほど、あの時に吉田さんがテントで語ろうとしていたのはこの話だったのか、という私にとっての謎の氷解でした。スピヴァクによるド・マン解釈、サンダースによるそのスピヴァク解釈を架橋しながら、本書における「群衆」は、ギリシャ劇に備わる「パラバシス」（劇中に登場しストーリーを中断して行われる合唱）の効果として読み込まれ、アレゴリーに備わる「他性」の潜勢力や、場へ介入する効果に接続されていきます。吉田さんがやんばるの森のテントで、座り込みながらこんな思想を温めていたのかと思うと、森のテントを共有した読者として感慨深いものがあります。

吉田さんは物語を中断し、執拗に介入し、他の仕方で語ること、あるいは語ろうと目指すと言ってもいいかもしれませんが、その存在あるいは効果において「群衆」を看取します。

予示的な集団性。主要なナラティヴに不躰に口を挟み、中断する声であり、複数の存在。とはいえ、必ずしも内的に統一されている必要はなく、時に不完全あるいは未熟でさえある。本書はそのようなものとして群衆をとらえる。(p.35)

このようにして、群衆の定義は、「はじめに」のひとつの山場になっているわけです。

「他の仕方で語る」とはアクティヴィズムなのであって、それは「距離を必要な介入へと変える」という、歴史において他者性をレッテル貼りされた者たちによる行為遂行なのであると、そのように読むだけでもこの本は十分にスリリングな1冊です。「応答可能な最小限のアイデンティティ主義」とスピヴァクの言葉を翻訳している部分は、当然、戦略的本質主義というスピヴァ

クの主張と無関係に読むことはもはやできなくなってしまうわけで、この「戦略的」の読み直しは、C・L・R・ジェームズの描く群衆が「ほとんど戦略的にとってよい」と説明する指摘にも連なるものとして、読む必要があります。

群衆というのは、宗主国や権力の側から「あいつら」、「奴ら」、「あれらの人々」というふうに突き放されていくのですが、その距離に介入していく創意に満ちた抵抗のスタイルとして群衆は出現する。「失敗や成功を含めて」「時に不完全あるいは未熟でさえある」という表現が鍵になっていますが、吉田さんは本書で、その失敗の部分非常に丁寧に読み直していく。その作業が本書で貫徹されています。

失敗というのは、スピヴァクがいうところの有色の女の二重の抹消という痕跡によって読み取ることが可能ではありますが、ただ抹消したと突き放すのではなく、なぜその抹消は起こるのかということを繰り返しそして執拗に読んでいくというのが吉田さんのこの本全体を通しての作業であるというふうに捉えました。

3. スコット、エドワーズ、連帯とカリブ

ブレント・ヘイズ・エドワーズとジョーン・スコットという重要な2人の研究者を本書が採り上げていることも、私にとっての注目すべき点です。吉田さんについて、私が語ることができるもうひとつでもあるのですが、吉田さんは日本におけるブレント・ヘイズ・エドワーズの参照者であるという件です。これは少々大袈裟な言い方で、エドワーズと言われても、恐らく今日ご参加の皆さんのほとんどが、あまり記憶に留めていない名前かもしれません。私としては重要な研究者だと考えて様々な機会に参照しているのが *The Practice of Diaspora* という本です⁶。この著作の中でエドワーズは、ジェンダー・

⁵ Mark Sanders, *Gayatri Chakravorty Spivak: Live Theory* (London and New York: Continuum, 2006).

⁶ Brent Hayes Edwards, *The Practice of Diaspora: Literature, Translation, and the Rise of Black Internationalism*

スタディーズのジョーン・スコット、こちらの名前は皆さんよく知っていらっしゃると思いますが、スコットがオランブ・ド・グージュ [Olympe de Gouges] を論じた *Only Paradoxes to Offer* という文献を参照している⁷。そのことに吉田さんが着眼しているのは、私としては非常に興奮するのでしょうか。同じ箇所を自分と同じように重要だと読んでいる人がいて、その読みをさらに開くような読みを展開している。そのような文献を読むというのは、他に上手い表現が見当たらないのですが、本当に喜びでしかない。それは第3章の歴史記述そしてハイチ革命における「友愛」の問題で取り上げられている箇所です。

C・L・R・ジェームズの『ブラック・ジャコバン』を、繰り返し書き直された複数のテキストであるとして、その経過を丹念に読むのがこの第3章の仕事です。「ハイチ革命」の経過と、ジェームズが『ブラック・ジャコバン』を執筆した20世紀中葉のカリブ、すなわち米軍支配からの離脱を図ろうとした時代の経過、あるいはさらに言うならば、ジェームズもまた人生の中で自身の変化という経験を重ねていく、その予感も含めて、複数の時間が並置されて読み通せるような、そのような第3章でもあります。

その第3章の中で、まず『ブラック・ジャコバン』を批評したジョーン・スコットを吉田さんは参照します。しかし、ただ参照するのではなくて、読みの水準を一段引き上げていくような読みを行なっています。

フェミニスト歴史学者のジョーン・スコットは、『ブラック・ジャコバン』から上記のカンボンの科白を引用しつつ、この場面が「博愛的な包摂の瞬間であり、黒人男性

が市民権と同等の身分へと参入するにあたってのしるしとして、黒人女性を用いている」と解釈する。スコットは、おそらく意図せずに、女性の存在を「ムラート」でなく「黒人」と修正しており、これを肌の色の微妙な差異にしたがってサン・ドマングに存在する人種主義のグラデーションに彼女が無知であったと読むこともできる。しかし、彼女の解釈が明らかにしているのは、普遍性への訴えは、一方で、フェミニズムの複雑な歴史における性的差異というパラドックスを解消し、他方で、地域ごとに社会的・経済的な階層性を構築してきた人種のグラデーションという困難に向き合う契機を糊塗する。普遍的市民権は、そのようなものとして構成される、ということだ。[中略] ムラート女性の包摂と排除は、博愛という概念の形成にとって本来的かつ構成的な動きとして刻印されているということなのだ。(p.170)

革命の予兆に膨れるハイチ(サン・ドマング)からの代表団が、奴隷制廃止を論議するフランス国民公会の議場で市民として迎え入れられる、人種超克の感極まる『ブラック・ジャコバン』のシーンにおいて、スコットは、女性の姿というものが抹消されていくという、その問題点を明らかにしているわけです。この箇所を私は「平等」の普遍化に内在した問題性、平等の理想を掲げたときに、セクシュアリティの差異の抹消が起こってしまうという箇所として読んだのですが、それは少し慌てた読解でした。

吉田さんは、スコットが、しかしその場所に居合わせたはずのムラートの女性を黒人として一括りにしてしまうことによるさらなる抹消を、

(Cambridge, MA.: Harvard University Press, 2003).

⁷ Joan Wallach Scott, *Only Paradoxes to Offer: French Feminists and the Rights of Man* (Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1996).

痕跡として発見している。これは先に示したようなスピヴァクを手掛かりに読解可能な、二重の抹消の問題をスコットにおいて検証した箇所と、まずは言えそうです。ただ、そこに留まらず、吉田さんは、平等よりも「博愛」の問題として、すなわち、第3章の結論に関わる「友愛」の問題として読み込むことに成功しています。植民地の男性が、独立共和国の市民として博愛を帯びるとき、内部の人種のグラデーションが構成的に抹消される。だがそこに、男根主義的な基盤を共有しつつ複雑に屈折するものが観察可能になるというわけです。微細で注意深い記述に瞠目する箇所でした⁸。

この第3章に続く「バンドン、脱植民地化の未完のプロジェク」と題された第4章で、今度はエドワーズが呼び出されます。バンドンの同時代に共通項として成立した「第三世界」概念は、1952年にアルフレッド・ソーヴィが考案した際に参照した「第三身分」と同様に、普遍性への希求が構成的に抱え込む隠蔽があることを論じる箇所です。

前章で引用した、ジョーン・スコットによる、1794年の国民公会での奴隷解放宣言の場面についての分析を想起してもいいだろう。サン・ドマングの代表団3人のうち、唯一の女性であるムラートの女性が他の二人によって代表されてしまうことの効果について、「男たちと女たちとの差異が、男たちのあいだの肌の色や人種の違いを消去する役に立つのだ。抽象的な個人という普遍性は、このようにして、この瞬間に共通の男性性として確立される」とスコットは述べていた(Scott 1996: 8-9; B. Edwards 2003: 130)。「博愛的」な男性同士の絆により人種に光が当てられると、

ジェンダー化の効果が見えにくくなる。そして、ソーヴィが参照していたシェエスのように、フランス市民という範疇内部での平等を実現しようとする、人種の隠蔽が際立ってしまう。そうではなく、バンドンと「第三世界」の両方において経済発展を最優先とする事態を下支えしている進歩的な物語は(それ自体は疑いようもなく必然であったのだが)、20世紀前半のブラック・インターナショナリズムを研究するブレント・ヘイズ・エドワーズがスコットを言い換えながら述べているように、「必ずしも人種とジェンダーが別個の範疇として思考されることのないような、変化に富み変わりやすい基盤」を見えなくさせてしまいがちなのだ。(pp.191-192)

スコットの読み直しを行なったエドワーズが、吉田さんの本のなかで第3章から第4章への橋渡しの役割というものを担っています。学説史として先行研究を整理するときに、それを系譜学のように示していく手法として見事です。そういう意味では冒頭で各章それぞれ独立して書かれているので、どこから読んでも大丈夫と評したのですが、本書は、実は巧妙に各章が相互に架橋しあっている部分がある。それを発見するのも、本書の読みの醍醐味でしょう。

少し話がそれました。カリブの知識人たちの連帯という実践、これは「はじめに」で出てきた「距離に介入し続ける実践」というふう言い換えて良いと思うのですが、そのような実践を、テキスト、手がかりとして、見えなくなっていく人種とジェンダーの交錯する基盤というものに取り組もうとするそのような研究の系譜が、スコットであり、エドワーズであり、そして吉田さんのこの本である。この点では、文学史というより、

⁸ 平等と区別して博愛を問いに付すこのような観点は、ユダヤ人差別と性差別の異なる表出を論じているブラウンの「寛容」の論考に引きつけて考察したいものでもある。ウェンディ・ブラウン著、向山恭一訳『寛容の帝国：現代リベラリズム批判』法政大学出版局 2010年。

社会運動論や社会運動史への架橋というものがなされている。連帯について考察する際に重要な1冊、本書をそのように位置づけることができるのではないのでしょうか⁹。

4.「黒い王者たち」の恥と罪責

こうして架橋された第4章で、人種とジェンダーのインターセクショナルな基盤というものを見えなくさせられたテキストとして、リチャード・ライトの反動的な言説・言論が解き明かされます。ポール・ギルロイはじめ様々な論客の研究を手引きとして、取り上げられているのはバンドン会議についてのライトのテキストです。

バンドンというと、これも少し脱線気味ですが、周年ごとに振り返られている脱植民地主義連帯の重大な契機です。2015年、インターアジア・カルチュラルスタディーズの1つの拠点にもなっている「亜際書院」が、明治大学で武藤一羊さんの講演を開催しました。Web上に講演録が採録されていたものを読みました(現時点では検索しても残念ながら見付かりませんでした)。武藤さんは、バンドンからダーバン、あるいはダーバン・プロセスという表現で、バンドンは国家から民衆に主語を移行させる運動であったと力強く講演されていました。同時代の経験に根ざした刺激的な講演だった。けれども、バンドンが繰り返し振り返られるなか、人種とジェンダーが打ち消しあって起こる二重の抹消という事態に踏みとどまって、吉田さん流に踏み込んで省察する声は響いていないように思います。

話を戻しましょう。1955年のバンドン会議についてのリチャード・ライトのテキストというのは、続く1956年のパリで開催された黒人作

家芸術家会議におけるライトの存在感にも接続している問題性です。すなわちジェームズ・ボールドウィンが1956年に黒人作家芸術家会議の報告者として書いた文章¹⁰を、並置して読みたくなるものです。また、ボールドウィンがリチャード・ライトを批判したというその批判を、呵責なく徹底的に、そしてホモフォビックに攻撃したエルドリッジ・クリーヴァーの文章¹¹の問題性にも波及するでしょうが、この問題についてここでは深入りしません。

吉田さんは、パリに向かうその手前のところでライトが、冷戦構造下での脱植民地主義の夢を仮託したとき、抹消すなわち引き算したというよりも、代入してしまったCIA流の心理学というものがあったことを、この章で詳らかにしています。また吉田さんは、ライトとは対照的にバンドン会議への出席がかなわなかった人物として、ポール・ロブソンがバンドン会議に当てた手紙を引用しています。それは当時猛威を振るったアメリカの反共主義の抑圧をテキストとして示す方法でした。

先に示したボールドウィンの報告は、1956年の黒人作家芸術家会議に出席できなかったW・E・B・デュボイスが寄せたメッセージを引用するという方法を取っています。パスポートの発行を拒否されたデュボイスを示しながらボールドウィンは、「国務省からそれでは出席を許されたアメリカ黒人とはどういう立ち位置なのか?」と問い、その背後の文脈を読者に推し量らせようとしている。本書で吉田さんは、あたかもこのボールドウィンの筆致を反復し継承していると想起させるのは、興味深いところです。

さて、その黒人作家芸術家会議については

⁹ 文学と越境・移動からブラック・インターナショナルリズムを読むものとして、社会運動論からこの系譜に付け加えるとするれば、例えば、ディヴィッド・フェザーストーンの著書を並置してみたい。David Featherstone, *Solidarity: Hidden Histories and Geographies of Internationalism* (London: Zed Books, 2012).

¹⁰ ジェームズ・ボールドウィン著、黒川欣映訳「黒い王者たちとその勢力：黒人作家芸術家会議にて」、『誰も私の名を知らない：人種戦争の嵐の中から』弘文堂 1964年所収。

¹¹ エルドリッジ・クリーヴァー著、武藤一羊訳「『アメリカの息子』ノート」、『氷上の魂』合同出版 1969年所収。

「植民地主義と情動、心的な生のゆくえ」というタイトルが付された第5章が焦点化しています。ボールドウィンが「黒い王者たち」と呼んで手厳しく批判をした会議の出席者たちのなかに、リチャード・ライトやエメセ・ゼールと並んで、第5章で吉田さんが論じるジョージ・ラミングが含まれていました。

植民地の知識人の役割意識や知識人としての生き方において、移動と連帯というのが、ある種の兆候というか特徴として備わっているだろうと思います。バンドン会議や黒人作家芸術家会議など国際会議をめぐる多数残されたテキストも、そのような観点から読み直されているでしょう。本書で吉田さんは植民地の知識人に迫るための分析的な視点を取り入れています。知識人たちが、民衆、大衆、本書における「群衆」に自らを重ね合わせ、近づこうとする時に起こる「恥」と「罪責という情動」の問題がそれです。

恥というのは、「カリブ海地域の歴史において人々を苦しめてきた、指導者の裏切り」(p.251)、すなわち近代化を推進する指導者が、「恥を媒介として新植民地主義的な状況を招く」(p.250)、そのような事態として吉田さんが観察しているものです。経済重視の方針があたかも普遍的なものとされ、元宗主国(私の場合はここで想定するのは米国ですが)と狡猾に交渉してみせているつもりが実は絡め取られてしまっている、そのような状況は多数のカリブの地域が体験したことです。ここでいう「新植民地主義」というのは、今日ならば「新自由主義」という言葉で、広く深く浸潤している政治、政治を食い荒らしていく略奪的なエコノミーの姿に重ねることも可能です。私はプエルトリコを研究フィールドとしていますが、プエルトリコの政治的な独立の是非というのは、常に経済成長の可能性において、語られたり、測られたりして、そして政治の腐敗を招いてしまい、独立

へ向かう政治的な意志はいつも先送りになったまま、宙吊りのままの現在がある、そのような地域です。あるいは沖縄の軍事基地から解放されたいという願いも同じように重ね合わせてみることができる。やはり経済の可能性において測られてしまい、そして政治の腐敗を招いて、そして先送りのまま現在があるというのは、よく皆さんご存知のことだろうと思います。

このような相似する状況を想起させながら読ませる第5章で、吉田さんはご自身が翻訳されたラミングの『私の肌の砦のなかで』の場面を引用しています(pp.251-252)。私が胸打たれた場面のひとつでもあり、本書よりも少し長めに、吉田さんの翻訳書から転載します。

これまでに聞いたことのないようなものだった。この霊歌に聴き覚えはなかったが、ぼくは声自体にもっと関心を持った。歌詞を聴きとろうとしたができなかった。それから、トランパーが歌声に合わせて復唱しはじめた。さらにもっと美しかった。カチツという音がし、数字を灯していた側面の光が消えた。歌声は終了したが、トランパーは低く、深い声で歌詞を暗唱しつづけた。彼が口にする言葉を、ぼくは記憶しようとした。

レット・マイ・ピープル・ゴー
わが民を去らせよ

「気に入った」ぼくは言った。「本当に、とても美しい。」

「声はわかるかい？」トランパーが聞いた。いまではとても真剣だった。

聞いたことがあるかどうか思い出そうとした。できなかった。

「ポール・ロブスンさ」彼は言った。「偉大なわが民の一人さ」

「何の民だって？」ぼくはたずねた。少し困

惑していた。

「^{マイ・ピープル}《わが民》さ」トランパーが言った。彼の声には力がこもっていた。それから表情がやわらかくなり、微笑んだ。ぼくの無知について微笑んでいたのか、あるいは箱と声、何よりもポール・ロブスンに満足して微笑んでいたのかは、わからなかった。

「君の民って誰のこと？」ぼくはたずねた。なんだか、ひどい冗談のように思えたからだ。

「黒人種さ」トランパーは言った。彼の顔から笑みが消え、態度はまた重々しくなった。ぼくは酒を飲み干すと、彼を見た。彼にはぼくの困惑がわかっていた。トランパーの言う民がもたらしたこのおののきは、生々しかった。初めは、彼が村のことを言っているのだと思っていた。このつながりは何かもっと大きいものだった。それを理解したいと思った。彼はグラスを飲み干し、テーブルに置いた。

「合衆国に行くまで知らなかったんだ」彼は言った。

(ジョージ・ラミング著、吉田裕訳『私の肌の砦の中で』月曜社 2019年、pp.437-438)

「黒人種」という言葉が使われています。カリブで育った青年主人公たちが、アメリカを経由することによって「黒人種」である「我々」を発見するのですが、その情動を喚起したのはポール・ロブソンの歌でした。トランパーという友が「良い歌なんだよ」と言って主人公に聞かせるカセットテープの音で、ロブソンの「レット・マイ・ピープル・ゴー」という歌が、まず声として響き、そして歌詞にある「マイ・ピープル」とは「黒人種」であり、それこそが私たちであるのだと認識論的な転換を促される場面です。この歌は「出エジプト」を歌ったものですが、

ロブソンの歌う「マイ・ピープル」はレイス、黒人であると、アメリカ体験を経た友が主人公に語っています。

このシーンを引き入れつつ吉田さんは、「恥という情動とは別なかたちでの、ただし、その歴史性をひきうけたかたちでの、存在の仕方が予感されている。そこには来るべき集合性への予感もまた潜勢している」(pp.252-253)とコメントします。群衆や民衆の連帯の可能性が輝いてほとぼしするような、ラミングが小説の中で実践した脱植民地の瞬間を、吉田さんは見出しているのです。

しかし、そこで論を止めないのが吉田流です。帝国主義との共犯性を省察する際に、被植民者の男性は罪を恥に置き換えていくこと、情動とはネイティブ・インフォーマントに割り振られた所作であること、そして心理学というものが帝国に代表される対敵作戦に用いられた冷戦期の所産であることなど、いくつもの補助線を引きながら、恥を母性に関連づけて植民地の情動とし、その上で被植民者が男性性を回復、あるいは獲得するための情動の方に罪責を配置していく。脱植民地化とはそのように方向付けられてきた。そういう問題性を吉田さんは精緻に確認していくわけです。「国民のイデオロギーによって……男らしさのアイデンティティを獲得するプロセスにおいて、男たちが出会ってきたトラウマを隠蔽すること」(p.262)とは異なる読みとして、吉田さんはラミングを注意深く再読しようとしています。

この章で扱われる罪と罪責や恥という語について、吉田さんはサルトルを引きながら、他者を媒介しつつ立ち上がっていく恥(p.241)を説明していくのですが、これは例えば、沖縄に向き合った大江健三郎が発した「日本人とは何か、このような日本人ではないところの日本人へと自分を変えることはできないのか」という

言葉を想起させます¹²。あるいは、沖縄の反基地・反軍事主義闘争に向き合って、沖縄に基地を押しつけているという恥なるものを媒介として、「日本」を立ち上げてしまうような運動論が隠し持っている国民主義というものが、いかに脱植民地主義の省察を経ていないか、そのようなことを吉田さんは実は鋭く批判しているのではないか。少し前のめりにですが、そのように読み過ぎてみたい箇所です。

また脱線したようです。過剰な読みはさておくとして、ラミングの小説において、主人公たちの情動は、言葉や言語よりも手前で、ロブソンの「歌声」、反復する「声」において掴み出されていることが私はとても重要だと読みました。それにしても、バンドン会議への出席を抑圧されたロブソンを、歴史を遡るようにラミングが小説の中で登場させていたという事実には驚かされます。小説が出版されたのは1953年ですから、ラミングは実現しなかったレイスの連帯の予感について、この小説のこの場面で、書き込んでいたわけです。「合衆国に行くまで知らなかったんだ」という友が反復する低く深い声。第4章から第5章へと引き継がれた吉田さんの問題提起は、この後、母性の不可能性を聴き取るラミングの耳の議論に接続されていくのですから、本書を読むことによって、この箇所は、なおさら私の胸に迫る場面として刻まれることになりました。

最後はちょっと感想文のようになってしまいました。吉田さんの仕事の表面をほんのちょっとだけひっかいた程度のことしかお話できませんでしたが、とりとめのない話はこのあたりで切り上げさせていただくことにしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

¹² 大江健三郎『沖縄ノート』岩波書店 1970年。

